新聞　2013年（平成25年）11月4日

神奈川新聞

学びのフォーラム〈92〉

平等の夢をリレー

七里ケ浜こども若者支援研究所主宰　滝田　衛

東京五輪と体育

昔語りをします。1964年10月10日、僕は中学1年生で東京オリンピックを迎えた。土曜の午前授業から急いで帰り、カラーテレビで開会式を見た。日本晴れの国立競技場、整然と行進する各国選手団に圧倒された。脳裏に焼き付いたのはマラソン。余裕で優勝したエチオピアのアベベと、必死に食い下がる銅メダルの円谷幸吉―そのコントラスト。

その頃の思い出は、中学の体育祭。小学生気分が残る1年生にとって初めての行事で、上級生を見習い縦横列の乱れない入場行進をした。集中力を象徴する指先緊張。

単純な僕はオリンピックの勢いで800㍍や1600㍍リレーに挑み、何と狭い庭に走り高跳びの器具を手作りし、熱を上げた。また女子バレーボール金メダルの影響か、クラスマッチのバレーネットが校庭に狭しと張られた記憶も残る。

一方、文化活動も盛ん。朝会の生徒会歌声活動、全校壁新聞コンクール、卒業の歌も生徒が作詞作曲した。授業はもちろん、補習や模擬テストもいっぱいやった。

僕は先生（もちろん苦手な先生はいた）をマジシャンのように感じた。戦後の貧しさが消え高度成長へ突き進み、受験戦争と裏腹に学校文化が咲き始めた。

しかし、ベトナム戦争や公害問題が起き、時代のひずみが露見したのだ。2年後の卒業式の練習中、先生たちが「君が代」「日の丸」をめぐって口論していた。僕は時代を感じた。社会の動向と切り離されていない学校の現実を見せてくれたことに、今も感謝している。

科学技術が発展し政治経済が複雑化すると、大人にも分からず、できないことが押し寄せる。2011年3月の東日本大震災と原発事故は、日本の脆弱さを露呈した。大人だけが抱えず、子どもと共に人間の英知を追究する、それが現代である。

20年、東京オリンピックは子どもの夢と可能性を実現するに違いない。だからこそ「いじめ、体罰、不登校、虐待」に共に向き合い、希望を実現するオリンピックを子どもたちと迎えたい。世界平和と平等をかなえるNew Tokyo Olympicのバトンを、全ての子どもにリレーしたい。7年後。